

石炭の
で、西条八十の秘めたる牛思い

「唄を忘れたカナリヤ」や「東京行進曲」「誰か故郷を想わざる」などの作者として知られる西条八十（一八九二～一九七〇）は、生前一万五千編もの作詞をした。単に子どものためだけの歌、大人向けの歌というのではなく、大人にも子供にもともに愛唱される歌を書くのが念願で、そのためいささかクスリがききすぎたのが「東京行進曲」の大ヒットだった。

早稲田大学の仏文学教授だった西条八十が、あるとき講義をしていると、教室の外をチンドン屋が「東京行進曲」を奏でながら通った。この曲が西条教授の作詞と知っていた学生たちはいつせいに拍手をした。このとき西条八十は講義をやめ、世にも複雑な表情で窓の外空を仰いでいたとか。

その西条の詩がめざしたものは、ひとびとの心にそこはかかない、未知へのあこがれをかき立てることで、たとえば「都会の記憶」では

日が燦く渚

ここは遠い田園

臥ている牝牛の白い腹毛に鼻をうづめて

わたしは甘酸っぱい匂を食る

ああ夕 家畜の懐に疼く

色辞せた都会の記憶よ

潮風にふるへる真白な絨毛

その中に恋人の赤い靴下が 黄金の緊子が

灯が 柳の葉が 静かに踊り めぐる
と、恋人と牝牛の上に神秘的なイメージを重ね合わせるのである。

西条八十には、このほかにもみずから牛にたとえて心境を語った「頽唐」、同じく牝牛に託して詩作の苦しみやあせりを歌った「牝牛の夜」などがあるが、生まれは東京・牛込、牛にたいして少なからぬ親和感を抱いていたことがうかがえる。しかも、西条八十は、死の前夜、とくに求めてスープとピフテキとサラダをペロリと平らげ、いとも満足気であったという。そして、寝る前にウイスキーを少量口にし、翌日、静かにベッドの中で息をひきとった。

また、八十は、白バラをこよなく愛したともいう。

